

令和元年度見附市総合教育会議 議事録【要約】

○招集日時 令和元年11月15日(金) 午後1時

○招集場所 見附市役所 401会議室

○ 会議に付した協議事項

1 中学生の放課後時間の見直しと帰宅後生活の充実について

○出席者(6名)

市	長	久住時男		
教	育	長	長谷川浩司	
教	育	委	員	小林弘武
教	育	委	員	武田一夫
教	育	委	員	小倉美砂子
教	育	委	員	齋藤義章

○関係者、学識経験者および事務局出席者(9名)

見附中学校長	多田茂
見附市スポーツ協会長	柴嶺哲
見附市スポーツ協会	中島賢一郎
教 育 部 長 (教育総務課長)	森澤亜土
まちづくり課長	吉原雅之
まちづくり課長補佐	伴内美和
学校教育課長	糺谷正夫
こども課長	大野務
教育総務課長補佐	湊屋一樹

午後1時開会

久住市長

ご多用の中、総合教育会議にお集まりいただき、大変ありがとうございます。今日は、中学校の部活動のあり方と放課後の過ごし方、そして教職員の負担軽減に対する課題解決に向けて、新たな提案をさせていただく。それに対して行政や市民が総がかりで子供たちの受け皿となる仕組みを構築したいと考えており、皆さんに諮らせていただきます。

見附中学校の多田校長、スポーツ協会の柴嶺会長からもお越しいただいており、様々な観点から現状と今後の見通しについて共通認識を深め、今後の中学生の放課後活動の支援策や受け皿の在り方について協議をし、また、ご意見を頂戴したい。

森澤教育部長

それでは、協議事項に入ります。今日は二つの事項についてです。一つは「中学校の放課後時間の見直し」、二つ目は「生徒の帰宅後生活を充実させるための支援策」です。一つ目について、多田見附中学校長から現状と提案をお話いただき、二つ目は教育長から提案や望むことなどをお話いただき、それに対して、スポーツ協会やまちづくり課、そして教育委員のみならずからもご意見を頂戴したい。それでは一つ目の「中学校の放課後時間の見直し」について、多田見附中学校長からお願いします。

多田校長(スライドによる説明)

中学校の放課後時間の見直しについては、中学校長会で長い時間をかけて協議してきた。具体的には、教室にエアコンが整備されたので、夏休みの何日かを授業日とする。そのことによって6時間授業日を5時間にすることが可能。5時間授業にすることで、1時間早く放課後活動に入ることができ、帰宅時刻も早くすることができる。目的は、完全下校時刻が早くなることによって、生徒が自主的な活動ができ、生徒の計画的に時間を使う知識と能力の向上、主体的に活動することを育成すること。もう一点は、教職員の働き方改革を進め、教育活動を充実させること。完全下校時刻を早めることで、そこで生まれる時間を教員が主体的に使える時間が増え、心身共に健康な状態で生徒に向き合い、教育活動の充実を図ること。

それに向けての現状と課題は、まず、生徒の帰宅時刻、4月から9月のいわゆる夏時間は、部活を終わって帰宅すると、多くの生徒は夜7時近くになる。朝は7時過ぎに家を出る生徒が多いので、学校にいる時間は11～12時間。家では、8時間睡眠とすると残りの4時間に食事や入浴、勉強をすると時間は無くなってしまい、1日のほとんどが学校中心の生活。家族の一員として手伝いをしたり、好きな本を読むとか、あるいはもっと自ら主体的に活動する時間はほとんどない。保護者からも、「部活で帰宅時刻が遅く、宿題や勉強する時間が無い」という声も聞かれる。逆に「もっと部活動をやってほしい」という声も聞かれ、保護者の価値観が多様化している。

教職員の勤務状況は、文部科学省から教職員の勤務時間のガイドラインが出され、月45時間年間360時間という残業の上限が示されているが、実態とはほど遠い。学校では働き方改革に取り組んでおり、朝の打ち合わせを毎日から週2回にしたり、様々な行事を削減したりいろいろしているが、それでも下校時刻を終えて教務室に戻ると6時半、そこから自分の仕事が始まるので、8時～9時が日常的。30～40代の教員は、家へ帰っても子どもと一緒にご飯を食べることがないとかが実状。働き方改革の教員へのアンケートでは「辛いです。どうにもなりません。改善策は今現在ありません。」「授業以外の多くの業務を生徒が帰った後に行っているの、働き方改革といっても取り組めない。」という声もある。心身ともに健康で教職を務めてもらいたいことと、授業の準備なども部活があるからできないというのは本末転倒であるので、教職員にゆとりを生み出してやる必要がある。

見直しの方向は、部活動の時間は確保しながら下校時刻や退勤時刻を早めて帰宅後の時間を確保する。子どもたちの自主的な時間を拡充したり、教職員の働き方改革を進めたい。具体的には、先ほど申し上げたように、夏の間完全下校時刻を冬と同じ5時半にする。部活動の時間を確保するために6時間授業を5時間授業にする。これを中越地区大会までの8週間で行うと、32時間の授業時間が不足するが、夏休みの終了を3日早めて授業時間を18時間生み出し、冬休みの前後にも授業日を設けることで32時間をカバーできる。もう一つ、新人戦は1・2年生だけであるが、体育祭が終わってからの2週間で8時間。これは、3年生が卒業した後も授業が組めるのでカバーできる。こうすることで、授業時数を確保しながら、年間を通して5時半下校で、今と同じ部活動の時間も確保できる。

これによって、子供たちは1時間早く帰ることができ、主体的な時間を持って、教員は部活以外の業務もかなりこなせるようになると思う。

長谷川教育長

「生徒の帰宅後生活を充実させるための支援策」について話をしたい。

いまほどの多田校長からの話は、4 中学校の校長と時間をかけて検討をしたもので、働き方改革に大きく貢献する大胆な提案であり、おそらく県内でも初めての提案である。なぜこのような提案ができるようになったかという、一つ目は、3 年目に入った中学校部活動の外部顧問派遣制度があること。二つ目は、すべての普通教室にエアコンを今年度に設置していただいたこと。三つ目は、この2年間で4 中学校が足並みをそろえて、夏場の部活動終了時刻を30分早めてきたこと。それでも文部科学省のガイドラインが示す部活動の適正な時間は確保している。

次に、この提案を受けての生徒の帰宅後生活の充実について。端的に言うと、生徒、教員、保護者・地域の三者みんなが良い方向になるのではないかと考える。生徒にとっては、1時間早く帰ることができると、その時間に何をするのかを主体的に選択することが出来る。これは、今後、高校や大学、社会人になった時に求められる主体性を身に付けることに繋がる。家の手伝いなどの家庭生活のこと。あるいは自分のこと、宿題を早く終わらせたり、週一回はスポーツや文化活動も選ぶことが出来る。

教員に関しては、多田校長が話したとおりであるが、健康になるとの話もあった。今まではスポーツジムに行っても風呂に入るだけだったと聞いたことがある。それが運動する時間が確保でき、健康につながる。また、遅い帰宅だと夕飯の時間も9時～10時など不健康である。それが改善されるだろう。そして、心のゆとりができ、自分の時間が持てることはとても良いことと考える。

保護者に関しては、今までは生徒の帰りが遅く、家の仕事を分担してもらうことは不可能だったと思う。それが、年間を通して5時半下校になれば、家の中での役割分担ができるようになるのではないかと。親子で話をして物事を決めることができる。

地域では、中学生のボランティアが考えられる。見附市の中学生はかなり地域に溶け込んでいると感じている。クリーン作戦や防災訓練、見附祭りへの参加率は非常に高いが、例えば、放課後児童クラブでのボランティアも考えられる。小学生からは「読み聞かせのお姉さんが来てくれた」とか、「バスケットボールのお兄さんが来てくれた」など言ってもらえる活動ができるとうまいと考える。つまりは、中学生が主体的に活動するとともに、保護者や地域、教職員が良い方向に動くものと期待している。

そんな時に、スポーツ協会やまちづくり課からどんな協力が得られるか、少なくとも良いので「こんなメニューがあるよ」と生徒に提示できればものを用意していただければ大変嬉しいと考える。それが2年から3年後にはより多くのメニューになってくれれば大変ありがたいと考える。

森澤 教育部長

今ほど、教育長から教育委員会の考えや希望に関する話があった。スポーツ協会、また文化・ボランティア所管のまちづくり課としてはいかがか。

柴嶺スポーツ協会会長

今の話を聞いて、すぐに我々が動かなければならない内容ではないと感じた。部活の時間がしっかり確保されているので、これ以上部活動を補完するための受け皿は必要ない。十分である。その中で、子ども達が早く帰宅したら何をするのか。もっとスポーツをしたい生徒がいるとしたら、スポーツ協会としては大変ありがたいこと。協会としては、もっと優秀なチームや選手が出てほしいと願っており、部活動とは違うやり方もあるのではないかと考えているので、本人の希望で協会で面倒を見てほしいという話が盛り上がるなら、また、違うスポーツをやってみたいなどの希望があるならば、全面的に受け皿としての協力をしたい。現実的には、各団体や指導者の確保、場所や時間など、詰めていく部分が多くあるが、もしそうならば、真剣に考えたい。

吉原 まちづくり課長

市内4中学校の文化系の部活動の現状は、各校に吹奏楽部のほか一つか二つ程度。また、市内の文化・ボランティアに関するサークルは245団体があり、この中には中学校の生徒の受

け入れ団体になり得るサークルもあると考える。中学生の受け入れについては、今後、必要に応じて各団体に打診したい。生徒とサークルの橋渡し・仲介は、まちづくり課で行うことが可能と考える。課題は、生徒の帰宅時刻が午後 5 時半となるが、市内サークルの活動時間のほとんどが午後 7 時以降であり、この時間調整が必要であると考えている。

森澤 教育部長

ここまでは、教育委員会の考えと思い、スポーツ協会とまちづくり課の考受け皿としての考えを聞かせてもらった。では、最初の、中学生の下校時刻について、教育委員各位からご意見をお聞きしたい。

小林 教育委員

私が PTA 役員だったころは夜 8 時過ぎでも教務室に先生方が多くいた。今もそう変わらず大変だろうと思う。5 時半下校で学校生活が組み立てられるのならば、進めていただきたい。その中で、早く帰宅した子ども達をどうするのか。何らかの受け皿を用意することは良いことだが、部活動の時間は確保されているので、余計なお世話になってしまわないか。大きなテーマは「子ども達の主体性を育むこと」であるから、早く帰宅して余った時間を何らかの活動に費やしなさいと仕向けるのは、果たして正解なのか疑問。何もしない時間も必要なのではないか。

武田 教育委員

先生方の働き方が厳しいと改めて感じた。時間短縮によって健康やゆとりが生まれるのであれば良いことであり、本当にそうなるなら進めてもらいたい。生徒にとっては、早く下校し、行く所もする事もないと違う方向へ向いてしまわないか心配だが、生徒も時間に縛られている中で、余裕ができることは良いこと。その時間をどう使うのかを考えることが大切で、その良いきっかけになり、大変良い取り組みだと考える。

小倉 教育委員

授業時数が確保できるなら、大変良い取り組みと考える。現在でも週に一度、5 限での下校日があるが、帰った子どもを見ると何もせず過ごしており、何をすべきかまでの考えに至って

ない。やはり、主体的に考えることがキーワードになる。その時に、学校側から「こんなことができるよ」という、ある程度の提言が必要と考える。まったく何もない状態から自分で主体的に行動できる生徒は少ない。もう一つは、先生が健康でいることは、子ども達にとっても良い影響を与える。疲れた状態の先生の授業よりも健康な先生の授業であるべきで、先生方の時間を確保する意味からも良い取組だと考える。

齋藤教育委員

下校時刻が早くなり、先生方の負担が減れば、本来の先生方の仕事ができることは良いこと。ただ、三つ気になることがある。一つは、時数の確保。標準時数というよりもこれまでの実績と同じ時数が確保できるか。先ほどの説明では確保できるとのことだった。もう一つは、1学期の時数が減ることになると思われるが、本来なら1学期に習うべき内容が2学期に回ってしまう、あるいは急ぎ足でやってしまうことにならないか。それが評価のうえで曖昧になったり不十分になってしまわないか心配である。もう一つは、授業よりも部活動優先と捉えられかねないということ。そういったことから、素晴らしい提案であるが、教室にエアコンも付いたことから、長期休業のあり方も考える必要がある。例えば、1学期を少し長くすることで1学期の時数を確保するとかで、部活動優先と取られる危惧を減らせるのではないか。また、教職員の業務の見直しが抜本的な問題であり、それを中心に置いて進めていくべき。

久住市長

これまでの総合教育会議では、我々からの提案を話し合ってきたが、今回は学校現場から提案いただいた。なるほどと思う良い取組であり、皆さんからも今、肯定的な意見を頂戴した。学校では時間や心にゆとりが無く疲弊していることばかりが言われている中で、どうやったら生徒も先生もゆとりが持てるのか、そのことを議論できるだけでも大変ありがたい。子ども達の主体的な活動をどのように育てていくのかは、今の時点では、例えば「わくわく体験塾」のようなある程度の選択肢を与えることではないか。そのような形をスポーツ協会や文化活動団地に期待している。以前から中学生に言われたことは、「俺たちが行く場所がない」。これが見附市の課題の一つ。その居場所の一つとして専門家の指導を受けられるとか、将来的には“たまり場”的な

場所も作りたいとも考えている。また、先生方の健康面でも時間に余裕ができれば、例えば、運動教室に通って、「みつけ健康の湯」に入ってから帰宅するなど、そういった事ができるようになれば良いと考える。

森澤 教育部長

これまでの発言では、下校時刻の変更は概ね肯定的なものであったと思う。子ども達の主体性については、何もしない時間も大切であることと、ある程度のメニューを示す必要があるだろうとのこと。ほかにご意見はないか。

柴嶺 スポーツ協会長

1時間早い下校時刻になるとのことだが、先生方のことで言うと1時間で良いのか。根本的に業務改善しないと1時間くらいではあまり効果が出ないのではないか。また、学校には部活の数が多い。子どもの数が減っているのに部活の数は変わらない。当然顧問の先生が必要だから忙しい。部活を減らせばよい。そして、ある中学校は野球、別の中学校はバスケットボールとか、やりたい部活がある学校へ行く。学区など制度上の制約を抜きにしての発言で失礼かもしれないが、各学校がある競技に特化した部活を持てばスポーツ協会としてはとても支援がやりやすい。

久住 市長

見附市は小さな市で、4中学校が互いにさほど遠くない。この4中学校をシャトルバスのようなもので結ぶ。そうすると今言われたようなことが可能になる。そこにスキルの高い指導者が入ることで生徒のスキルも高くなる。そんな議論もしていたところ。

柴嶺スポーツ協会長

ただ、(大会に出場するには)県の中体連の規則が改善されないと難しい。

多田 校長

県中体連の規定は、全国中体連の規定を受けてのもの。合同チームの出場は、全国の規定からして難しい。合同チームの目的は、合同チームを作る事ではなく、強いチーム、勝てるチー

ムを作らせることを避ける目的で作られている。ここ最近やっと働き方改革やスポーツの見直しのガイドラインの中で、その既定も見直しましょうと始まったばかり。現状では、合同チームは可能だが、例えば神戸市では拠点校方式をやっているが、拠点校以外の学校は大会に出られない。

久住市長

全国の規定を変える必要があるとすれば、もっと現場の声をスポーツ庁なり国に上げる必要がある。その声が聞こえてないのであろう。

柴嶺 スポーツ協会長

それが実現すれば、すべて解決する。生徒は授業が終わればそれぞれの部活がある学校へ行く。各校で特色のある部活動ができる。また、部活の数が減り、先生方の仕事が減る。

久住市長

大きな自治体では難しくても、見附だからできることがある。課題の解決方法を組み立て、それが(中体連の規則上)なぜだめなのか、ダメな理由があるのか、そんなアプローチの仕方が大切。

吉原 まちづくり課長

団体競技では今のとおりだが、個人競技では他校で練習していても自校で出場することはできるので、個人競技についてはすぐにでも拠点校方式は可能だろう。

柴嶺 スポーツ協会長

部活動の時間帯は、総合体育館はほとんど空いている。活用すべき。拠点化できれば総合体育館も有効に使える。

長谷川 教育長

現実的には、例えば、まだチームが組めるだけの人数がいる学校では、自分たちだけで出場したい思いがあるだろう。もう一つは、夏場は部活時間が2時間あるので移動時間があっても

可能だが、冬場は6時間授業してからになるため、移動時間を入れると部活時間が無くなってしまう。そのあたりの検討も必要。そう考えると、学校(教員)だけで部活動を行うのではなく、将来的には社会体育に移行していくのだろうと考える。

小林 教育委員

部活がたくさんあるとのことだが、現実はない競技が多い。子ども達のニーズを受け入れるだけの種目数はない。文科系も吹奏楽部ともう一つぐらいしかない。これでは何かをしなさいとは言にくい。今の議論は学校から部活動を外す方向になっているが、拠点化すればなお数が減るだろう。ならば、社会体育や文化系団体でのメニューで丁寧に手当てするしかなくなる。

久住 市長

根本的に、部活でなければいけないのか。社会体育などではだめなのか。その議論を整理する必要もある。例えば、部活としての美術部ではなく、「ギャラリーみつけ」で絵を習ったほうが良いのかどうか。どうしても学校教育の中で行わなければならない理由があるのかなど、そのところが見えてない部分。

多田 校長

学校としてもなかなか割り切れない部分。部活動は、勝利を目指すものでもあるが、すべての生徒を救う部分がある。また、部活の中で生徒指導をしている部分もかなりある。

久住 市長

そこを割り切らないとこの先のソリューションが見いだせない。生涯学習や社会教育が充実してきた中で、そこに任せることはできないのだろうか。そのあたりの議論を深めてもらいたい。

柴 嶺 スポーツ協会長

教職員の働き方改革が今回の話の発端と認識している。部活動が多くあって、顧問や指導者に教員を充てて、それに力を入れざるを得なくなっているから先生が忙しいのではないのか。

糀 谷 学校教育課長

市長の言われる、部活なのかスポーツなのかの議論もそうだが、中学校の先生は部活動があるから長時間勤務になっているのは事実。しかし、部活動に教育活動の意味を見出している部分も多々ある。そこをどう整理していくのが大事だと考える。仮に部活動が無くなれば、教員は本来の業務ができるようになるだろうが、逆に部活動をとおした生徒の健全な発達はどこで確保できるのか、地域や社会体育で賄いきれるのか。そこが多田校長が言う割り切れない部分だろう。将来はそこへ向かっていくかもしれないが、今は 1 時間下校時刻を早め、先生方の業務時間を確保し、生徒の主体的な時間も確保していくものと考えている。今は、0 か 10 かという議論はできないので、段階的にどうしていくかが今回のテーマと考える。

多 田 校 長

選手が勝つとか、競技が圧倒的に上達するとかであればスポーツ協会に任せた方が良くし、学校から手が離れても良いと思うが、授業で活躍できない生徒、いい姿を見せられない生徒が、授業から離れて部活動で先生とまた別の関係を作ったりできるので、そこをすばっと離すことができるかは難しいところ。

小 倉 教 育 委 員

子どもが減って部活動も減ったことから、市内大会が運営できなくなり、今年から市内大会が無くなり、いきなり中越地区大会に変わった。身近な大会ではなくなって、勝ち負けの要素が強くなった。それによって、楽しんだり体力を作るための部活ではなくなるのではないかと感じる。その辺も先生方の悩みだろう。

柴 嶺 スポーツ協会長

部活動で就学する学校を選択することはできないのか。それが可能なら解決するのでは。

長 谷 川 教 育 長

学区外就学の許可要件として、部活動は認めていない。理由は、それによって一部の学校に集中することで、他の学校の存続が危ぶまれる可能性があるから。これはずいぶん前から議論

されてきた。しかし、ここ 20 年ぐらいで 3 つの中学校は 200 人減、他の1つは 100 人減で、当時とは状況が違うことから、拠点校方式も検討する必要が出てきたのかもしれない。

久住市長

世の中の流れを見れば、将来的には学校から部活を外す方向だろう。それが違うというのであれば、その明確な理由が必要になってくる。

森澤教育部長

次に、子ども達の主体性を育むためにはどうしたらよいか、ご意見を頂戴したい。

齋藤教育委員

主体性を育むことは、今の授業や諸活動の中で行われている。自ら考え、判断し、行動する力。これが主体性であり、生きる力だろう。自分で課題を見つけ、判断し解決する。その中で友達や大人と関わり、社会と関わっており、実際に行われていると考える。学校週5日制が始まった当時に、今日のテーマと同じように、子ども達の時間が増え、土曜日1日をどう過ごすのか、学校は子ども達をどう過ごさせるのかが課題としてあった。これと同じで、子ども達自身に考えさせて行動させることが大切。帰宅後の夕方の時間であるので、一番大切なのは家庭の中で何をするかを親子で話し合い、家での役割分担だとか、あるいは勉強をするとか、自分で考える。そういう意味では、家庭内での親の役割も大事である。

小倉教育委員

子ども達自身が、何のために学んでいるのか、何のためにやるのか、意味合いを理解することが大切。そのためにも大人たちがどう対応するかが課題。例を挙げれば、学校の調理実習で習った料理を家で作り、家族が美味しいと言ってくれる。褒められたことと共感を得られたことが喜びになり、学ぶことの意味を理解することにつながる。難しいことだが、教育現場からそういったアドバイスやメニューを作っていただけるとありがたい。今の子ども達は、ネット社会で情報は自分一人で得られるが、社会に出て人と付き合っていくことがより求められる時代でもある。また、運動部の子ども達は文化活動を、その逆も然りで、特に文化部の子ども達は基礎的な体力

を付けることは将来にわたって大切。

武田教育委員

中学生の主体的な活動は、何も無いところから自分で考えて活動することはまだ無理ではないか。やはりたくさんメニューを用意してあげる必要があるのではないか。学校や家庭、大人たちが情報を与えることが大事ではないか。子ども達の空いた時間が有効に活用できるようご努力いただきたい。

小林教育委員

今、委員の皆さんが言われたように、ある程度のメニューを用意して進めていく事になるのだろうが、子ども達に予定表を作らせて、子ども達を管理することだけは避けてもらいたい。管理しないことが主体性を育てることになると考える。教育委員会も学校も保護者も、その1時間を大きな心で見えあげる勇気が必要。

柴嶺スポーツ協会会長

スポーツは、従前からのものだけでなく、ニュースポーツと言われるものがどんどん出てきている。スケートボードでもオリンピック種目になっている。昔は遊びだったものがスポーツとして専門的になってきている。例えば、毎日体育館にスポーツインストラクターがいて、今日はこのスポーツ、明日は別のスポーツができて、いろんなスポーツを体験することによって子ども達の主体性の育成に寄与できるのではないかと考える。

中島スポーツ協会事務局長

12月にスポーツ協会の表彰を行うが、144名が選出されている。多くの方が活躍されているが、私たちの活動によってもっと活躍される方が増えていく事を期待する。

久住市長

主体性のことでは、夢中になれるものを持つことが大事と感じている。集中することが幸せなこと。集中することは心の健康につながり、ストレスの解消にもつながる。子ども達には、集中できるものを見つけてもらいたいし、そのチャンスでもある。選ぶのは子ども達自身だが、選ぶメ

ニューは用意してあることが必要だろう。そして、週5日あるのでスポーツと文化活動を一つずつが理想だろう。また、家庭でのお手伝いが大切であり、大人はそれを褒めてほしい。それが「世に役立つことを喜びとする子ども」が育ち、自分の存在感や社会性につながっていく。そのことを保護者も理解していただいて、家庭での過ごし方を一緒に考えていただきたい。最初からすべてが上手くはできないだろうが、できるところからスポーツや文化のメニューを作っていただいて、皆さんからご協力を戴ければありがたい。

森澤 教育部長

たくさんのご意見を頂戴した。来年度から実施される放課後時間の見直しによって生まれる時間の活用については、一つ一つ積み上げていく必要があり、皆さんの協力を戴きながら進めていきたいと思う。

以上、時間になりましたので、閉会としたい。本日は大変ありがとうございました。

午後2時54分閉会